

「中国（アジア開発途上国における水資源管理のための水科学に関する国際会議及び現地調査）」報告

研究第一部 主任研究員 遠井 文大
主任研究員 瀧 健太郎



1. はじめに

2006年6月7日（水）～12日（月）にかけて、「アジア開発途上国における水資源管理のための水科学第一回国際会議（仮訳）」が広東省広州市で開催された。この会議は、あらゆる水問題に係る知見を国際間で情報交換し、アジア諸国での取り組みをより発展させる事を目的とするものである。

当研究所からもこの会議に参加し、自然再生に係る研究事例を報告し会議に貢献するとともに、各国の最先端の研究内容を得ることができた。さらに自然再生に係る先進的な取り組みが実施されている太湖（江蘇省）の現地調査を行なった。本稿では、その概要を報告する。

2. 「アジア開発途上国における水資源管理のための水科学第一回国際会議」

この会議は、中国南部で行われた最初の大規模な会議であり、アジアをはじめとする33カ国からの参加によって構成され、以下の5グループによるプレゼンテーションが行われた。



開会の状況



プレゼンテーションの様子

- ①水問題解決のための水科学技術について
- ②水文研究における新技術の開発や運用について
- ③水資源計画や管理のモデル技術について
- ④水環境管理について
- ⑤持続的水資源管理について

現在、アジアは世界の1/3以上の人口とともに、多様な文化や言語を保持している。そのような中でアジアの国々は社会経済開発を進め、類似した難しい問題に直面し、人口増加の中、産業化や都市化にも取り組んでいる状況である。アジア諸国では環境問題の他、多数の資源問題を抱え、その中でアジアモンスーン地域もまた同様に水問題（水資源・水環境等）が最も重要な課題である。

当研究所からは、水資源開発後の日本の先端的取組みとして、琵琶湖（滋賀県）及び安室川（兵庫県）

における自然再生の研究事例を発表した。

3. 太湖の自然再生における現地調査

太湖は江蘇省にある水面積2,428km²、流域面積36,500km²、平均水深2.0m、総貯水量44億m³、流域人口、3,458万人である。上海の水源としても重要な湖である。太湖では83年6月に計画された836計画に基づき「太湖水汚染制御と水環境修復技術及びモデルプロジェクト」が実施中で、その中のひとつとして湖岸域の自然再生が実施されている。

今回は、太湖の中でも良好なヨシ群落が残されており、湖と地域社会の関係が色濃く残っている西山地区を視察した。太湖のヨシ帯は、例えば日本の代表的な湖沼である琵琶湖のものと比較して奥行きがあるように感じられた。一部の群落は、遠く数百メートル離れた沖帯に確認できた。これらの群落は、コイ科魚類等の産卵・稚仔魚の生育場として非常に有効に機能していると考えられる。ここで生育する白魚、銀魚、白蝦、といった固有の魚介類が、太湖周辺特有の生活文化・食文化を育てている。

太湖においても、近代化・モータリゼーションの波が押し寄せ、結果として前述のプロジェクトが発足するに至っているが、政府の判断でさらなる開発が制限されるなど徹底した対策がとられている。一方ではその影響により、既に開発され湖畔の別荘地などの価値が相対的に高まり、新たなビジネスチャンスも生じているという。



豊かなヨシ帯



水辺の一大開発の状況

また、太湖周辺には延々と低平地が広がり、その中を緩やかに流れる小川の周辺に家々が立ち並ぶ。日本では失われつつある水辺の暮らしが残されており、独特の景観を構成している。このような経験を得て、今後、より総合的な水辺の再生を目指すためには、生活文化の観点からアプローチも重要であると感じられた。